

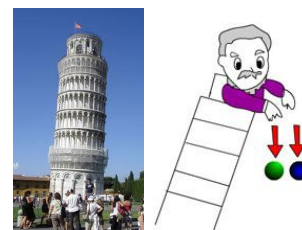
26期生の皆様ー4

(古い時代の哲学をなぜ勉強するか)

中間試験はいかがでしたか。次なる目標は高総体ですが、悔いのないよう最後の練習に励んでください。こちらはそれと関係なく粛々と哲学の話をしていきます。

高二の三学期に始まった授業で西洋の古代ギリシアと中世スコラ哲学にかなりの時間をかけました。ギリシア哲学というのは、日本で言えば縄文時代から弥生時代に移り変わる頃のことなので「そんな科学がまったく発達していなかった時代の、原子のこともビッグバンも知らなかった人たちの思想なんか価値がないとちゃう」と関西弁で疑問を持つ人もあるのではないかと、思います。

事実、ヨーロッパ中世では重いものの方が軽いものより早く下に落ちるというアリストテレスの説が信じられていたのを、ガリレオ(1564~1642)がピサの斜塔から鉄アレイとテニスボールを同時に落としてみて、同時に着地することを確認、この説が間違っていたことを証明した(ある理科の先生によるとこれは伝説らしい。ただし、アリス



トテレスもでたらめを言っていたわけではないのですが、そのことは別の機会に説明します)。この種のことから、古代ギリシアの哲学やそれを継いだ中世のスコラ哲学など、近代に始まる自然科学のめざましい発展によって、とっくの昔に克服されたと考えている人も少なくありません。

また「歴史を勉強すると、昔より今の方がずっと進歩していることは否定できないのではないか」と標準語で考える人も多いでしょう。18世紀のフランスで盛んになった啓蒙主義は、「人類はたえず進歩するぞんす」と楽観的に考えていました。その当時はニュートン(1643~1727)たちによって自然科学がめざましい進歩を遂げていたので、彼らがそう考えたのは無理からぬことです。啓蒙主義者の多くは、科学が進歩すればすべての謎が解けて宗教は消滅すると考えていました。19世紀のさらなる科学技術の発展の後、それは確信になった感がありました。しかし、20世紀の二つの世界大戦と他の悲惨な出来事によって、この確信は失われました。



確かに学問というのは、ふつう時代が下ればそれだけ進歩します。なら、哲学も同様に時代とともに進歩するはずで、それゆえギリシア哲学なんて骨董品みたいな古い思想なんぞ現代には役に立たないのではないか、というわけです。

しかし、ギリシア哲学は依然としてその価値を失っていません。アングロサクソンの世界(合衆国やイギリス)では、20世紀の中頃からアリストテレスの復興という現象が起こっています。ある専門家は「難しい言葉をまとった『現代思想』に比べて、素朴ながらもかえって身近なところから、しかも大きなスケールで問題に取り組んでいるギリシア哲学は、今なお多くの示唆に富み、また汲めどもつきぬ謎に満ちている」(荻野弘之、『哲学の原風景』、3, 4頁)と言っています。でもなぜそんなに古いものが今にも通じるのでしょうか。問い方を変えると、なぜ科学が発達しても、哲学には関係ないということがあるのでしょうか。

それはそれぞれの学問が考える対象が異なるということを考えるとわかります。自然科学は物質(感覚で捉えられるもの)を対象とし、哲学は存在すべてを対象とします。別の言い方をすると、科学はものの一面を、哲学は全体を見るのです。このことを人を知ることにたとえてみましょう。自然科学による人間の理解は、その人の体に関するデータをとることです。たとえば身長体重、お

なかの周囲の長さ、血圧や血液中のコレステロールなどの値、DNA など。これらはすべてきちっとした数字で表れます。

でも健康診断の数値を見ればその人がわかるとは誰も思わないでしょう。その人がどんな人かは、その人につきあって、その人の好み、いろんな問題についての興味関心と意見、性格や感情の表し方などを観察して、少しわかるというものではないでしょうか。そして、「この人は頑張り屋だ」とか、「ちょっと冷たい人だ」とか判断する。これらの判断はその人の一面しか表さないが、その人の本質的なところを言い当てていることもあります。つまり、人を知る場合、科学的な装置を使ってその人の物質的な面を調べることは、その人を理解するために一定のデータを提供するにしても、その人がどんな人かを説明しない。その人についての認識は、普通の手段を使って頭で考えてある程度達成することができる。

その第一の理由は、人間が物質だけではないからです。物質面を見ることは、人の一部を見るに過ぎない。また人間においては、物質の面が全体（全人格）に占める割合が他のものよりずっと小さいので、物質的データ（例えば健康診断のデータ）ではその人の人となりはほとんどわからない（血液型が人の性格と関係があるというのは嘘のようです）わけです。

ですから、人間を理解するためにはその人を「全体的に見る」という作業が必要です。先ほど言った、好みや性格や感情などの面を観察して、それを総合する作業です。それには精密な機械は必要なく、人間に備わっている五官と理性で十分だと言えます。また、人間の神秘を探るには専門的な自然科学の知識がなくてもできることは、古今東西の文学を読めばわかる。なぜ『徒然草』は今でも読まれるのでしょうか。一つはそこに綴られている観察や判断が、今の社会や人間にも十分に通じるからで、その知識を得るために吉田兼好は物理や化学を修める必要はなく、独自の鋭い観察力と深い思考力で十分だったからでしょう。

これと同じように、この世界がどうなっているかは、精密な科学のデータがなくてもできるわけです。だから、古代ギリシアの哲学者たち、またその哲学を継承した中世のスコラ哲学者たちの考えは、彼らの自然科学の知識が幼稚だからという理由で無視できないのです。ただし、ではギリシアの哲学者は現実を正確に把握し分析したかと言われれば、もちろん各自大きな限界がありました。それはキリスト教の立場から見るとよくわかります。たとえば私がよく引用するアリストテレスは、自由人と奴隷は人として平等ではない、あるいはこの世は永遠であると考えていました。

しかし、この種の限界は仕方がないものだと思います。なにせ、存在全体を正確に把握するというのは不可能だし、人間は生きている時代の考えに制約されるから。そこで、一人一人の哲学者の間違えをあげつらうのは卑怯と言えるでしょう。それより大切なことは、哲学者と言われる人たちが、この様々な難問にどれほど真摯に取り組んだのか、それを見ることではないでしょうか。

最後に、科学の進歩が必ずしも人間の幸福を生み出さないことは、科学の進歩の結果起こったおぞましい事件を見れば一目瞭然です。科学の進歩はしっかりした倫理観が伴っていない場合、原爆に象徴されるように、人間自身を不幸に陥れる。その倫理観を教えるのは、哲学や宗教以外にはありません。また、科学が進めば進むほど、わからないことが多くなってきたのも事実です。誤解のないように言っておきますが、私は決して自然科学が役に立たないとか言うものではありません。資源の少ない日本は技術立国になるほか発展の道は少ない。ということで、理科もまじめに勉強してください。

